

ひきよせ

神殿普請より百年

長沼から岩見沢の地に移転して8年後、大正10年4月24日、神殿建築に着工。同年9月10日上棟式（左写真）、翌年11年4月14日、遷座祭が執行された。以来、百年。たすけの道場として、風雪、地震に耐え、おつとめをつとめ、願い、感謝する場所を守っている。

（写真はモノクロ写真をAIで彩色しています）



大正13年6月17日 増野道興先生ご来会 落成時のきれいな葺葺き屋根が確認できる

発行所
天理教夕張大教会
〒068-0029 北海道
岩見沢市9条西6丁目21
☎ 0126-22-1248
FAX 0126-23-7275
yubaridai146@gmail.com
ホームページ
bariten.main.jp



LINE 友達登録
お願いします

お知らせ

秋季大祭 10月15日（土） 9時30分開扉献饌
世話人松田理治先生ご巡教
全教一斉にをいがけデー 9月28〜30日
第30回女子青年大会 11月27日（日）

神様がするのや

本部の普請や

大教会長 藤田大和

大正時代、曾祖父藤田好助三代会長は、新天地岩見沢で、当時住み込み人6家族、会長家族を合わせて40人以上の在所帯で、食べるに事欠く赤貧のどん底を通っていたが、たすけ一条の道の進展の為に、尚も苦勞をいとわなかった。信者一同一丸となつて人助けに邁進し、親神様の不思議なお働きにより、身上をご守護頂いて入信する人は増え続け、遂に念願だった神殿普請に着手した。しかし、目標とする大建築に対し、余りにも経済的に苦しく、普請が進まなくなっていた大正10年正月、好助会長が本部大祭にお召し帰りした際、御本部の増野道興先生から言われたのが、冒頭の言葉である。更に「藤田、お前はそれ程偉いのか考えてみよ。何にもならん奴ではないか。一人の人を助けるのも、神が助けるので助かるのや。神の力であればこそ出来る。身上も事

情も同じ事や。お前の小さなや知恵で出来ると思うのか。そんな事では何年経つても出来はせんとぞ。自惚れるなよ。神様を自分と比べて頼りないものにしていいのか。神様をそんなつまらぬ方と思っているのか。」と叱咤激励された。この言葉に一同覚悟が定まり、無一文から借金をして、普請は一気に進み、翌年神殿は無事竣工されたのである。だが成人への道は尚も厳しかった。膨れ上がった債務は重くのし掛かり、完成した殿内を日々埋めたのは、信仰者達ではなく34名もの債権者達だった。信者が寄り付かなくなり、やがて教会の土地も建物も差し押さえられ、競売に掛けられた。この時ご先祖様方が挫けてしまっていたら、今の夕張は無い。立ち上がった青年会員25名は、路傍講演隊を組織し、全道を2ヶ月間、力の限り布教した。翌年には役員、青年16名が命懸けの血判状を提出し、「決死隊」を結成。信仰の拠り所たる神殿を取り戻すご守護を頂く迄は帰らないと誓い、所持金を全部お供えして無一文で道内各地

へ布教に旅立った。この誠実を親神様がお受け取り下さり、別科生（修養科の前身で期間は6ヶ月間）一挙に85名。新たな教会名称17ヶ所が誕生し、信仰者達の神一条の心は練磨され、教会再生に光が差したのであった。以上、神殿普請のあらましを振り返り、今回久方ぶりにご寄稿頂いた前会長様に筆をお渡ししたい。

この神殿は百年

前会長 藤田文雄

「この神殿は百年！」とは3代藤田好助会長の言葉。4代増平会長が私に伝えてくれた。今年は竣工以来、満百年。1922年、大正11年4月14日に、旧神殿からお目標様をご遷座。以来たすけの道場、おつとめの場として風雪に耐え百年の歳月が過ぎた。今、幾多先人のご苦勞を偲び感謝を捧げた。

ところで大教会の古い建物3棟は客殿、神殿、教祖殿（現第二客殿）の順に建てられた。なぜこの順になったのか？その訳は、二代真柱様ご一行を迎える旬が到来したことにある。当時の北海道教区長、板倉槌三郎先生が好助会長に「今度二代真柱様御一行が北海道教務支庁ならびに道内の有力教会を巡教される。客殿をふしんして迎えさせて頂いたらどうか。」と言われたのだった。そこで神様を迎

える気持ちで一同が勇み立ち、上棟式からわずか2ヶ月の1918年、大正7年7月7日に客殿が竣工。同年8月16日、中山正善様、御母堂様、玉千代様、山澤為信、山澤ヒサ、松村吉太郎、梶本宗太郎、吉川くにえ、板倉槌三郎、板倉ヒロ、板倉知弘の各先生を迎え、1500人の参拝者が喜びに湧いた。さらに神殿ふしんは板倉先生ご指導のもと御本部の仮神殿（現会議所）の建物を基準に建てられた。教祖殿の建物は翌1923年、大正12年8月14日に遷座された。

この普請の借財によって大変な苦勞があった中に多くの教会が誕生した。今に至る夕張の道の背骨となる神殿ふしんであった。ご参拝の折には、ぜひ先人のご苦勞と喜びを想い浮かべて下されば幸いです。 9月7日記

神殿を取り巻く話

大教会役員 史料部 藤崎 実

この神殿は、竣工当時（大正10年）は岩見沢で一番高く大きな建物で、駅から歩いてくると、七条に禅洞寺があるが、その向かいに、直轄信者の伊藤円吉さんと石田清之助さん宅があり、角は小林豊店（北之真分の小林）で、そこから神殿が見えた、と言っていた。最初は榎まさぶ葺きで、エゾ松かトド松の手割りの榎材（厚さ2ミリ程度）を使っていた。長くもつても15年から20年と言われるところを、夕張では雨漏りのする所だけ、差し榎といって張り直して、昭和30年代に六ツ切りと言われるトタン葺きにし、昭和48年、大教会に陞級する前に、長尺のカラートタンに葺き替え、平成28く29年の大修理でガルバリウム鋼板葺きとなった。

既報のように、梶川創一郎先生が、陞級する直前の青年会総会について書いて下さり、30名を超す若者が集まって盛り上がった。その日の戸外は大風が吹き、嵐のようだった。神殿内のエレキバンドの大騒ぎとは変わって、神殿の屋根が風によって持ち上げられ、大屋根が膨らむようになっていた。文雄委員長も心配になって見ると、「小幅板を持って、腰道具を下げた旭都の藤崎忠勇さんが、さつさと梯子を掛けて屋根に登って、飛ばされそうな屋根に、小幅板を釘で打ち付けて、押さえて留めて下さった。なんと機敏な先生なのかと、感心したよ。」と話していた。

昭和61年の秋か、増平会長・三十乃奥様が、旧会長宅はどうしても寒さが身に堪えると、信者会館二階に移られた頃。神殿も暖かくしたいと、天井裏に断熱材のグラスウールを敷き詰めよう、となつた。厚さ10センチの断熱材をもつてすれば、今まで逃げていた熱気がいくらか留まって、燃料費も抑えられると考えての事だった。中段までの六間に七間の天井は、90センチ角の合天井で、広い。それを吊っているのが、実に粗末な、材木の端材だったのが驚かされた。樹の皮が付いたような、薪にされるような端材で、大丈夫かと思つた。



六切りトタン葺き



榎葺き屋根修繕中 現在の薪小屋方向から撮影

歴史を紐解くと、大正10年、神殿普請中に、沙留の北夕分教会から、

貨車に500石もの原木の古損木(屋根のない無蓋車に5台分)が献納されたので、神殿普請は終わりまで材木に困らず進んだとあった。きつと古い松材で、その木材のかなあと思ったものである。

創立百二十周年を前にした平成29年の夏、四国で数多くの教会の普請を手掛け、木材の目利きが出る方が、事情あつて夕張に初めて参拝に来られた。

参拝場をぐるっと見回して、「木の節を隠すことなく出しておられ

八月月次祭の様

コロナ禍は収まる気配もなく第7波とも呼ばれる感染拡大が続き、8月中には北海道での1日の感染者数が8千人を超える日もあつて、気の抜けない日が続いていた。一方で高校野球はコロナの影響に負わずに開催され、厳しい暑さの中球児たちが汗を流す姿は、日本中に感動を巻き起こした。

大教会祭典日の15日は夏休み中という事もあり、親子連れの参拝者も多く見られた。

定刻9時半より開扉献饌。祭儀式のち祭文奏上。その後、座りづとめ・十二下りのてをどりが勤められた。マスクを着けてのおつとめ奉仕、参拝は暑さを感じ、参拝場に設置された2台の業務用扇風

る。立派な普請ですね」と褒められた。木の節にその普請の苦勞が現れていて、実に味わいがある、説明できない力がある、とも。

夕張の神殿の、特に御拝柱、神床の左右の柱には、その存在も誇らしげに大きな節があつて、あたかも私達を見下ろしているようである。「私は本物だが、あなたの信仰はどうか?」と、教祖百四十年祭に向かい、進歩前進しているかと問うている気がする。夕張の皆と共に、胸を張って進みたい。

機はゴウゴウと音を立てながら参

拝者に風を届けていた。

講話に先立つて辞令交付があり、おつとめ奉仕員として祝梅分教会の高橋悟志さんと清真布分教会の渡部修太さんが新たに登用された。辞令を受け取ると参拝場全体から拍手が沸き起こった。

講話には大教会長が立ち、まずコロナ禍の中、大教会に集まった奉仕員、参拝者に対して御礼を述べ、「祭文において、論達第三号に触れさせて頂きました。この10月の大祭後には、新たな論達が発表される予定です。教祖百四十年祭の三年千日のスタートを来年に控え、私達信仰者にとつての今後の指針となるものが、お示し下さる訳です。そして論達に込められ

た思いを、私達に分かりやすく伝える為に、本部巡教が行われます。夕張では11月にお願いする予定をしています。原則教会長夫妻、布教所長夫妻、また後継者夫妻が対象になっていますので、万障繰り合わせの上、皆で揃って拝聴させて頂きましょう。本部巡教の後は、大教会より各教会へ巡教を行う事になります。その時の状況に合わせながら、となるでしょうが、それぞれの教会で準備を進めて頂きたいと思います。

表統領先生が本部大祭の講話において、年祭の意義とは何であるか、という事を一言で申されました。『三年千日の意義というのは、ひながた実践の心定めである』と仰りました。私もなるほどと、それを聞いて得心がいきました。初めての年祭活動というものが行われた時、本席・飯降伊蔵様より『五十年の間の道を、まあ五十年三十年も通れと言えはいこまい。二十年も十年も通れと言うのやない。まあ十年の中の三つや。三日の間の道を通ればよいのや。(おさしづ・明治22年11月7日)』というおさしづがありました。ひながたの五十年と比べれば、三日くらいのものだ、という事だと思えます。その三日の間の道を通るだけでいい、と仰せになっているのです。

また、ひながたを思い返す時、教祖の御苦勞を思い浮かべ、暗く大変な部分をイメージしがちです。それを真似て通れ、とは教えられていません。私達が真似て通るべきは、教祖伝や逸話篇から伝わる、教祖の言葉遣いや親心、どんな時も笑顔で通られた態度、またどうしたら陽気に通れるのかという話の台、こういったものだと思います。これから3年間、信仰者として自分が真似出来るものを見つけ、実践していく事を神様に見て頂く、というのがこの三年千日の意義である、と思うのです。そしてこの三年千日を力いっぱいつとめた後には、喜びを見せて下さる、という事を約束して下さい。

諸先輩方の3年間の通り方を見て、私は育ってきました。またこれからの3年間を、がむしゃらに走り抜きたい、と思っております。私が布教の家東京寮に入っていた時の事です。ある時から、戸別訪問に回る事が出来なくなりました。自分の限界を知って落ち込んだのと同時に、これではいけない、と思いました。そして寮長先生や仲間と相談して、私は夜の街で火の用心と路傍講演を、一人でするようにしました。続けていると、立ち止まって聴く人や、声を掛けてくる人がポツリポツリと出てきました。その内、私が夜の街を歩

く度に見かける、若い男の人の姿が気になるようになりました。麻痺があるのか、半身を引きずるように、いつも辛そうな顔をして、その人はトボトボと歩いていました。ある時、バツタリと出くわしたので、勇気を出して『天理教のものです、どこが悪いんですか?』と声を掛けました。しかしその人は『治らないんで、ほっといて下さい』と言って、歩いていきました。私は諦めず、その人の家を調べて訪ねたり、街で歩いている姿を見つけ、頼み込んでその場でおさしづを取り次ぎました。その後、ひと月程経って、私が夜道を火の用心に歩いていた時に偶然再会すると『あの時はありがとうございりました。お陰で腕が上がるようになりました』と私の前で、腕を上げてみせたのでした。その時程、私が神様を感じた時はありませんでした。一生懸命に通れば、姿は見えずとも、不思議なお働きを見せて頂ける、という事が分かって『神様はあるんだよ!僕はそれを感じた事があるんだよ!』と誰にでも自信を持って言えるようになった出来事でした」と話された。

終了後には奉仕員・参拝者全員で、撤饌・復旧やお下がりを手際よく進めた。お盆という事もあり、祭典後にお墓参りに向かう参拝者も何組か見受けられた。

学生会 夏期リーダーの集い

8月7日、8日の二日間にわたって、中河詰所にて天理教学生会夏期リーダーの集いが開催された。

この行事は、主にお道の教理や学生会活動のノウハウを学ぶための講義と、その振り返りや相互理解を深めるための座談会やねりあいで構成されている。

今回参加した富山優理さん(栗山分、夕張学生会委員長)は、

「自らの未熟さ、無知さを痛感するとともに、他の参加者の熱量を感じ、感化されました。これからの夕張学生会の活動に生かしていきたいと思います」と、これからの学生会活動への抱負を含めて語ってくれた。

学生生徒修養会 高校の部

コロナ禍の影響で3年ぶりの開催となった、学生生徒修養会・高校の部は、8月8日から8月12日、本部周辺施設にて行われ、夕張からは高橋都志子さん(祝梅分、夕張支部女子青年委員長)、高橋有志子さん(祝梅分、おちば管内学生寮幹事)の2名がスタッフとして参加した。

期間中は、感染症への不安に加えて、例年にならぬ猛暑に見舞われ、肉体的にも精神的にもタフな状況

となったが、両名は学生たちのために、それぞれの役目を果たすべく、心を込めて一生懸命につとめた。

修了式の際に、学生たちよりも感動して大粒の涙を流してしまっただという高橋都志子さんに、その理由について話を聞くと、

「学生たちが期間中に上手くいかないこととか壁に当たって悩んだり泣いてる姿見てたので、それ乗り越えてよくここまで頑張った！えらい！って気持ちと、あとはみんなへの感謝ですね！こんな私を受け入れて色々悩み話してくれたら、サポートしてくれたら、本当に良い子たちばっかりでありがとう！ってひたすら言っていました！

あと、身上で誰も抜けることなく来てたんですけど、最終日の朝に1人過呼吸になって救護室で休むことになって。せっかくこまで来たんだから退寮式一緒に出れるようにお願いとめをみんなですせていただいて、その後、その子も出席して最後迎えられたので辞退者が出なくてよかった！有難いー！って安心した気持ちもありました！
もう愛おしくて離れ離れになるのがすごく寂しくて、学生が泣いてるの見たらたまらなくなりまして！」

少年会夏のこども会 大教会ひのきしん

8月11日、大教会を会場に「夏のこども会」を開催。少年会員17名、育成会員13名(7家族)が参加した。

当日は爽やかな晴天の中、10時から受け入れ開始、13時までの間に、家族ごと自由に参拝し、畳拭き、椅子拭き、除草、廊下掃除等、メ

修養科を終えて

第972期 中井富雄

大変暑い期間であり、またいろいろとありましたが、大きな身上に見舞われることもなく、無事に修了させていただきました。入学当初は、昨年怪我をした足の調子が思わしくなく、不安もありましたが、お陰様で歩いて通うことができました。これも皆様のおかげです。

ここを終えた後は、修養科での経験を生かして、新たなスタートを切りたいと思っています。詰所の皆さまには大変お世話になりました。本当にありがとうございます。



ニューの中から選んで、ひのきしんをしてもらった。その後、お下がり配り、それぞれボルダリングの壁へ。意外と難度が高く子供も大人も、納得ゆくまでチャレンジし続け大好評。それぞれ解散した。少年会員がたくさん集まって、行事が開催できることを願う今後を企画していきたい。(団長 藤田)



大教会日誌抄 8月

- 1日 たすけ推進会議
- 3日 会長夫妻、帰会
- 6日 会長、幌部分巡教
- 10日 会長夫妻、北網分巡教
- 11日 少年会夏のこども会
- 13日 会長、善進道分巡教
- 14日 月次祭準備
- 15日 月次祭
- 19日 会長夫妻、札美分月次祭へ
- 20日 会長、洞爺湖町緑化ひのきしん
- 23日 会長、おちばへ
- 24日 会長、本部神殿当番
- 26日 本部月次祭
- 27日 遥拝式
- 27日 会長、かなめ会
- 28日 会長夫人、おちばへ
- 28日 会長夫妻、
- 29日 新任直属教会長夫妻研修会
- 29日 会長夫妻、帰会

庶務部 8月

- ▽修養科 972期修了生 8・27
- 中井 富雄(直轄)
- ▽修養科 975期新入生 9・1
- 高橋 悟志(祝梅)
- ▽教人資格講習前・中期受講 8・27
- 熊谷 明人(清真布)
- ▽教会長夫妻特別講習会受講 8・27
- 岩佐 善昭(志加ノ谷)
- 眞鍋 桂司(本三川)
- ▽詰所教養掛
- 9月 渡部 修(清真布)
- 10月 千葉 祐生(大龍)
- ▽をびや 1件